
大海賊時代に来た死神

死神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大海賊時代に来た死神

【NZコード】

N4503Y

【作者名】

死神

【あらすじ】

現世で寝てしまつた死神零番隊長。起きたら何故か大海賊時代のONE PIECEの世界に居た。その主人公（死神）が海軍に入つて頑張る話。

1 あれ? これは何ですか? (前書き)

作者が書いてる2作品と同じ名前ですが、設定は同じですが、話と繋がってません。

1 あれ? ジーはありますか?

「ジーは、海軍本部の医療施設の一室。

「う・・・? ? ? ? なんでだ?」

疑問を持つていると、

ガチャ

「? ? 「おお。起きたかい?」

「(誰だ?) はい。」

? ? 「おっと、自己紹介をしてなかつたね。私は海軍本部駐在の医療班員のアスクだよ。」

「俺は何故ここにいるの?」

ア「信じてくれ無いと思つが、本当の話なんだ。君以外の海兵らが目撃しているからね。」

「だから、なんだ。」

ア「いいかい、良く聞いてね。今日は全員集合して情報会を朝開いてたんだ。医療班も一応海兵だから、集合してたよ。それで開いてから20分位たつた時かな? 突如左の空間にヒビが入つたんだ。全員何事か! ? って騒いだんだ。そしたら、ヒビが開いたんだ。まるでチャックを開けるように。その中から君が出てきたんだ。 . . .
・ 信じられるかい?」

「そうか。俺は、そこから来たのか。」

ア「…普通、驚くでしょ。」

「本当は驚いてるや。自分でも分からぬ。なんでこんなに冷静なのが。」

ア「そうかい。」

「で、何は？」

ア「ここは海軍本部にある医療施設の一室だよ。」

「海軍本部？」

ア「海軍本部は偉大なる^{グラントライイン}航路の真ん中にある島『マリソンフォード』に建設した建物のこと。海軍総本山でもあるけどね。」

「…」

ア「ここは精銳が集まってるんだよ。」

「海軍ってなんだ？」

ア「海軍から知らないのかい？教えてあげるよ。世界政府直下の海上治安維持組織だよ。」

ア「さういえば、君の名前はなんだい？」

ア「そういえば、君の名前はなんだい？」

「俺は櫻井 海。」

ア「海君だね。もうそろそろ、情報会に戻らなければならない。君も連れてかなればならないけど良いかね?」

「ああ。」

海軍か・・・。海兵は・・・海軍兵士の省略言葉か。

そして、5分位歩いてオリス広場に着いた。

? ? 「報告しろ。」

ア「はい。名前は櫻井 海。海軍をしらないそうです。」

「(この変な人は誰だ?)」

ア「どうした?」

「いや、あの人誰かなー?って、思つてただけ。」

ア「あの方はセンゴク元帥だよ。」

「元帥? って何さ。」

ア「あれ? まったく軍隊のこととは知識無し?」

「かもな。」

セ「（困ったぞ。）」

ア「軍隊の中で一番偉い人だよ。」

「あ、そう。」

セ「（こいつは何者だ？）」

ア「あとでこいつのことは教えるからね。」

「お・・・おひ。」

セ「こっちから聞いていいか？」

「なんだ？」

ア「おい、だから敬語！」

「アスク、俺は敬語が苦手なんだよ。」

ア「間違つてでも言つた方が良いと想つが？」

「多分、言つた事無いから無理。」

ア「言つた事も無いのかい？」

「そうだよ。」

セ「聞いてるか？」

「聞いている。」

セ「何故、海軍を知らない？」

ア「（それ、私も聞いたかった。）」

「俺が居た所は、軍隊なんか関係無かった。てか、軍隊すらない。」

セ「軍隊が無いだと…？」

「てか、俺が見えるのか？」

セ「何を言つてこる？」

「ちよつと待つてひ。」

そつ言つて、刀を収納する。すると由て隊長服が黒に、黒い死霸装の上が白いTシャツに、下が薄水色のジーパンに変わった。

セ「何だー今はー?」

「今の格好が見えるのは当たり前。さっきの格好は普通、見えない。」

「

セ「何故だ。」

「違う世界に来た影響かもな。」

セ「違う…・・・世界だと…?」

「だから、言つたじやねえか。俺の居た国は軍隊なんて存在しない。代わりに自衛隊が存在する。自衛隊については質問するな。」

セ「……だが、何故普通の人人が見えないのだ？」

「さつきの格好は、“死神”の格好だ。」

全員「「「「！」」「」「」「」」

ア「（“死神”！？）」

「黒い死霸装を着て斬魄刀を持つ人をそいつ。別に無差別に殺すとこお前らの思想とは全然違う。」

セ「死神は何をする。」

「俺らは悪靈・虚^{ホロウ}の退治者だ。」

セ「虚？」

「大体巨体だな。あれが普通サイズだからな。」

そう言って、快速船を指す。

セ「！？・・・まさか！？」

ア「（情報と一致してゐる？）」

「分かつたか？死神は護廷十三番隊に所属している。」

セ「じゃあ、貴様は？」

「一番隊～十二番隊まであるが、俺は零番隊だ。一人のみだ。」

セ「何故、隊が違う。」

「一番隊の隊長が一番強いよくなってるんけど、俺、そいつ・・・山じいより強いからそうなつた。山じいより経験は少ないけどな。死神の寿命でどのくらいなのかな？山じいはもう千年生きてるけど。俺は二十五年。」

セ「一？」

ア「千年！？」

「やうだよ。死神はまだ生きる。」

セ「そうか。だいたいの事は分かつた。そこの列に並んでいれば良い。情報会を再開する。」

だいたいの事は分かつてもうえたかな？

1 あれ? なぜですか? (後書き)

どうじょつか。ボートとしてたり黙こついた。

感想等、お待ちしています。

2 主人公設定とオリキャラ設定

“主人公”

【名前】
さくらい
櫻井 海

【職業】

トリップ前：死神

護廷十三番隊の特別部隊、通称“零番隊”所属。零番隊隊長。

トリップ後：海兵

(予定) 海軍本部少尉 海軍本部大尉

【年齢】

見た目：14歳

実際：25歳 26歳

【戦い方】

トリップ前：鬼道と（白打と）斬魄刀一刀流

トリップ後：鬼道と斬魄刀一・二・三刀流と霸氣

【斬魄刀】
せいけつちゅう
「青龍」

主に水関係の能力を持つ。

【銀虎】

主に電気系の能力を持つ。

【黒鷹】

主に闇系の能力を持つ。

この三本はそれぞれ伝説級の斬魄刀と言われている。その三本を同時に持つた者は最強の死神になると言われているが、海が持つまで信じる者は居なかつた。これも、海が零番隊に入ったきっかけ。

【降魔剣】

別名“俱利伽羅”と呼ばれる、不思議な刀。

【白鳳凰】

刀を抜けば封印されている白い炎が開放され、白い炎を纏いながら戦う。

降魔剣には珍しい治癒能力と火系の能力を持つ。

【零番隊】

隊が着いているが、入ってるのは海一人のみ。入れるのは、山本元柳斎重国もと“山じい”こと一番隊長より実力があり、中央四六十室にも認められないと入れないと最強部隊。

隊花：“オリーブ” 花言葉：“平和”

【霸氣】

特殊な“霸神の霸氣”

【その他】

- ・生まれつき特殊能力と不思議な体質を持つ。それはゼウスの実の息子であるため。
- ・潜水能力が高い。
- ・資格が大好きで合格した数が100を超えている。

【弱点】

- ・気温が40度越えした日。
- ・参謀系

“オリキヤラ”

【名前】

アスク

【職業】

海軍本部准将兼本部駐在医療班員。

【能力】

悪魔の実の能力者では無い。

【霸氣】

見聞色と武装色が特化していく、戦闘に向いている。

【その他】

- ・六式の使い手
- ・ドレークとは仲が良い。
- ・次期医療班長
- ・来月に少将に昇格する事が決まっている。

『世界観』

原作通りの大賊時代。違うのは、ホロウ虚ハタハタが存在するのみ。
(後、海が居るだけ。)

とつあえず、こんな感じです。まだまだ本編でオリキャラがバンバン出できます。

2 主人公設定とオリキャラ設定（後書き）

アスクの職業の所、漢字だけだから、読みにくい！？
次回は主人公が疑問を持ちます。

3 なんでまた事情聴取をしなければならない

＝オリス広場＝

セ「情報会を再開する。次！」

？？「はつ！！^{イストラブル}東の海で、魚人海賊団を発見。」

「なあ、アイツ誰？」

ア「ああ、あいつはライン。海軍本部准将だよ。」

「へ～。じゃ、魚人は？」

ア「なんて説明すれば・・・まあ、生まれつき人間の腕力の10倍の力を持つてる種族かな？あと肌の色が違うのと水かきがついることかな？ほとんどの魚人とが人魚は魚人島に居るよ。」

「ほえ～、ここはいろんな種族がいるんだな。」

ア「ああ。ん？」

「どうした？」

ア「あの、元帥。なんですか？」

セ「・・・・少し、声を小さく出来ないのか？」

ア「あー、無理です。」

セ「まあ、良い。」これで、情報会は終了だ。だが、まだ集会は終わらない。」

「えー？ 終わっちゃったのー？」

ア「つるせこ。」

ガ「何故じや、センゴク。」

セ「死神の情報がそんなに無いだろ。」

ガ「なるほど。」

セ「分かつたか？ 聞くぞ。」

「…………。」

なんか違くね？さつき“だいたい分かつた”って言ってたぞ？

ア「返事くらいしろよー！」バシッ

「イテーよ、つたぐ。」

セ「……」ホン。気になつてるのは沢山ある。順番に聞いていく
が良いか？

「わつ、良いよ。どんどん質問して來い。」

セ「まず、斬魄刀から。」

「斬魄刀は死神か死神代行しか持てない。斬魄刀を選ぶ事も出来ない。斬魄刀が持ち主を選ぶんだ。」

モ「ちょっと、待った。」

「？」

モ「ああ、私はモモンガ。海軍本部中将をやつてる。よろしくな。」

「おう、よろしく。で、質問は？」

モ「斬魄刀って本当に存在するのか？」

「さっきの刀が斬魄刀だけだ。」

モ「そうか、“伝説の刀”って、呼ばれる斬魄刀は存在したのか。」

「降魔剣も在るぞ？別名“俱利伽羅”」

ア「え？あれも在るの？」

「おう。まあ、それは後で。」

セ「順番と言つたが2つしかない。次で最後だ。『虚^{ホロウ}』についてだ。」

「虚か。」

セ「そうだ。」

「虚は、現世を荒らす悪靈。その正体は何らかでの理由で落ちた人間の魂。人間の魂魄が主食で、生きた人間を襲つては死に至らしめる。と言つ生き物みたいな奴。」

ア「どんな奴だよ・・・・。海賊より悪じやねえか。」

「かもな。」

ア「特徴とかは?」

「特徴は、ある例外を除いて白い骸骨のような仮面を付けている奴。仮面は心を失った本能を隠す為だとか。」

ア「へえ。」

「あ、ちょっと待つて。虚について一気に話すからメモしたい奴はしといた方が良いと思うよ?」

そう言つたら、ほとんどの海兵・記者がメモを取り出す。まあ、記者は妙な貝?を取り出したけど。あれって、ボタンがあるんだね。始めて見た。

「大きさはいろいろ。小さいほど知能が高く、強い。逆に大きいほど知能は獸と同じくらい。・・・・・・」

まあ、ここは省略する。長いから。

（12分後）

「分かつた?」

セ「ああ。だいぶ分かつた。それで言いたいことがある。」

「？」

なんだ？

セ「アスク。お前が言え。」

ア「はい。海。さっきの虚はこの世界にいるんだ。」

「！？」

なんで！？

ア「今日からひょつと二ヶ月前だな。虚がこの世界に来たのは。」

「……（マジでーへビツツって来た！？）」

ア「その虚がこの世界で暴れてる。多大な損害を生んでいるのはその“虚”だ。」

「損害ついで、島を荒らしたりとか？海賊よりも多い？」

ア「そうだな。両方とも合っている。」

「そうか。なんか俺がここに来た理由がなんとなく分かつたようだ。」

ア「……。？」

「ん？あーあれか。」

ア「黒揚羽？」

オ「ん……………。」

モ「おい、それを見るな。」

「？」

モ「いいつはクモクモの実を食べた蜘蛛人間なんだ。」

「へー。蜘蛛人間な。世界は広いなー。」

ちょっと待った。蜘蛛人間ってスパイダーマンじゃねえの？だつて
そうだろ？へーじゃあ、あいつは指先から糸が出たりしてwww。
(笑)

ア「あ、止まつた。」

「地獄蝶だよ。ん？」

『話したい事がある。そここの世界の事だ。』

「山じい？」

『そつじや、お主、今違つ世界に居るじやろ？』

「今、こここの世界に虚が暴れてるって聞いた。“その虚を全て退治

せよ”だろ?「

『その通りじゃ。できるかの?』

「相当な・・・・膨大な時間が掛かるけどな。それでも良いか?」

『OKじゃ。すまないの。こんなに大仕事を押し付けて。』

「俺は零番隊長だ。元々大仕事しか来ない所だからな。」

『本当にすまない。』

「ああ、俺は任務を必ず終了させます。」

『ふむ。頼んだぞ、“櫻井隊長殿”。』。

「了解。」

通話が終わると、地獄蝶は舞い上がった。

「アスク。」

ア「ん?どうした。」

「俺、海軍入るよ。」

セ「…?」

ア「…?“きなりどうした…?」

「俺、ここに来た理由が分かった。こここの世界で暴れている虚を全て排除する事が仕事だった。元々大仕事しか来ない部隊だからな。少し慣れてる。」

ア「そうなんだ。」

モ「全て排除は難しいぞ。」

「でも、仕事なんだよ。隊首会がある時以外はこここの世界で任務を終わらせなければならない。ただ、どこの組織に入つても良し。と言つ条件もあるからさ。しかも、こここの世界の事もよく知らないから。で、海軍に入ろうつかと。」

ア「私は賛成だ。」

モ「私もだ。」

セ「ふむ。海軍本部の士官学校に1年通つて貰つてから正式な海兵にする。それで良いか?」

「OK。」

これで、明日から士官学校に通つ日が始まる。

3 なんでまた事情聴取をしなければならない（後書き）

はい。とりあえず、仕事が決まりました。
次回から、「士官学校編」が始まります。

4 鍛錬場～破道確認～

“士官学校の教室”

先「はい。今日入学した、昨日いきなり現れて有名人の櫻井 海君です。」

おいおい、小学校の先生かよ。おい！

先「櫻井君は「君付けなくて良い。」櫻井は、任務でこここの世界に来るので、居ない時があります。それでは、真ん中の席へ。」

君付けは気持ち悪い。

後、この席順は毎日変わるらしい。一番前の一番左が一番成績が良い学生だ。

しかし、今日は4月8日。ちょうど、学生達が一学年上がる日なのだ。その時は席順は関係無い。後、このクラスは成績優秀の人しか入れない。

ちなみに席はこうなっている（日常）

1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	

今日の席は11番だ。

今日からほとんどの日は、全て体力作り。（勉強する事がほとんど

無いため。）

？？「ねえ、ねえ。櫻井）。」

「誰だ。」

？？「僕は、ファール。」

ファールつて、おい。

ファ「よろしくね。櫻井君。」

「海で良い。ファールつて呼んで良いか？」

ファ「うんー。よろしくー。」

「おひ。」

ファ「ほら、ほら、早くしないとー。成績が下がるよー。」

「後で行くから。」

俺には瞬歩があるからな。瞬歩の速さは夜一と回りくまでも有るんだが、だからな。

ファ「えー。行こうー。」

「分かった。」

ファ「ーーー。ヤバイよー！あと2分しかないよー。」

「捕まつてろ。」

「フア 「え！？」

「良いから。」

死神の格好にもならずに瞬歩が出来るようになつたから楽だ。

ガシツ

「行くぞ。 “瞬歩” シュンツ

『大鍛錬場』

先 「遅いな。 櫻井とフアール。」

シュンツ、スタッツ。

フア 「おおーギリギリセーフ！」

「間に合つた。」

モ 「ー？」

「あ、モモンガ発見。」

モ 「今は駄目だぞ。 鍛錬だからな。」

「あ、そつか。 でも、無理だ。」

モ「・・・」

周りを見ると、（元帥と三大将と参謀と拳骨を除いた）海軍上層部と少将数名と准将数名とクラスメイトが待っていた。

先「櫻井は知らないか。俺は本部大佐だ。」

「あ、大佐だつたんだー。」

先「そうだ。」

この人、大佐らしい。

先「今から、何を鍛えても良い。六式を使いたいなら六式を、剣術を磨きたいなら剣を使つてる将校に頼め。俺に頼んでもいいぞ。櫻井は自分で鍛えたいなら、自分でな。以上！」

すると、学生達が将校に頼んで行く。

ファ「なあ！ 海は？」

「ファールはどうするんだ？」

ファ「僕は六式だよ。アスク准将に頼もうかな？ つて・・・あ、取られた。」

「ドーベルマン中将とかは？」

ファ 「それだー！じゃー！僕行つてくんなー。」

「おひー。」

俺は自分でやらないとな・・・。

先 「ん？ 櫻井は自分でか？」

「そりだが？」

先 「頼めば良いだろ？」

「俺の斬魄刀を使うとき靈圧が高いことが多い。」

先 「ふむ、そうか。じゃあ、頑張れ。」

「おひー。」

「どうじよつ。鬼道でも鍛えようかな？ 最近なかなかやつてないからな。」

誰も居ない所でやう。」

「よし、ここには人は居ないな。」

ここで鬼道の威力を確かめよう。

モ 「（何をするつもりだ？）」

ファ 「はあー。」

ドー「あまい！もつと、早く走れ！」

ファールは只今、“剃”に挑戦中。

「破道の四、白雷！！」

指先から一條の雷を無事に放つ事に成功。威力もある。壁に焦げ跡ができたけど・・・。

ファ「！？何アレ！？」

んー、物質・・・あ！砲弾発見！

ガラガラ

ガ「おい！死神！その砲弾を・・・？」

「破道の十一、綴雷電！！」

砲弾に沿つて、電撃を放つた。これも成功。

ガ「！？」

砲弾は無事。まだ使うかもなー。そのままにしよう。

ガ「なんじや・・・今のは・・・。」

次は伏火か。これは大丈夫だからな。うーん。この砲弾をなんとかしたい・・・あ、あれがあつた。

「破道の五十四、廢炎！！」

円盤状の炎を放ち、砲弾を焼き尽くした。

「ん？ 野次馬？」

「アーネスト・アーネスト・」

「あ、
フアール」

「アーヴィー君、『剃』習得したよ！今、『嵐脚』に挑戦してるよ。」

一 頑張れ、フアール

フアーーああ！」

よし。
鬼道はこれができればもう大丈夫だ。

次は・・・なんでもいいからとにかく確認しなければ。

4 鍛錬場～破道確認～（後書き）

次回も確認です。なんの確認かは次回で。

5 斬魄刀の威力確認

「・・・・・。縛道は相手が居ないと無理だし。まあ、良いか。応用系を確認するか。」

応用つて、まあ、なんとなく。乱菊が言つてた。

あとで、物凄く尊敬の視線を感じるんだけど・・・野次馬とかクラスマイトとか。

「なんだ。」

気になるのが、なんで俺こんなに冷静なんだよ。多重人格みたいだな、おい。

フア「なんか尊敬しちゃう。」

? ? 「櫻井すゞ」ウイーーね！俺、ニロドーーす！ー！」

居るんだ、ここにも、チャラ男が。

二「死神なんだよねー。」

「ああ。お前は・・刀？」

二「そりゃ多分、強い方だぜー？学生の中で。」

「ま、」

「『手合わせしないか?』

「いや、やめたまつが身の為だ。」

「何でだよ。」

「後で、斬魄刀の威力確認するから。今は違ひなど。」

「分かつた!」

よし、チャラ男が離れたから確認しよう。

で、斬魄刀をぬ・・・・あ、ここでやりたくないな。海に向けて放ちたいな。下手すると鍛錬場が消滅しちゃうー。

ア「それじゃあ、港へ行くか?」

「?声に出てたか?」

ア「まあな。」

「港に行く。」

フア「僕、斬魄刀見たい!」

二
「俺もだ！」

「はあ、見たい奴は遠くから見てろ。近くても半径40m近づくな。
先に行く。 “瞬歩”」

シンロ

モ
剃では無いもんだが・・・

フアー よし！早速！“弟”

二 ああ！ ノア＝川！ “弟”

アーリーは意外と優秀です。

II 軍港 II

ふう。着いた。ちなみに今は死神の格好になつてゐる。

二「本物」――――――――――――――

モー本当に在ったみたいだな。

なんかやりにくいな。まあ、約束は守ってるから良いか。

「今から斬魄刀とは関係ないことをするから。」

うん、この一つは関係無い。

ちょっと待って、最初のやつにくらい。なんで青雉とかいるの！？で
か、上層部全員集合しちゃったよ。政府と海軍の。五老星居るし！
これは昨日アスクから教えて貰った。

「破道、氷牙征嵐！！」

海に向かって冷氣の渦を放つ。

ピキイー——————ン——————！

全員「——」凍つたあ——————！」

青雉「あらりら？」「の子何なの？」

ここつウザイ。

まず、銀虎を抜く。刀先を凍つた海に向け、

「破道、金剛爆！！」

ジユワ——————

全員「——」溶けたああああ——————！」

先から大型の火球を放ちました。（笑）

思つたけど、鬼道だけでこの世界のほとんどの人に勝ちそうだな（

(笑)

フア 「・・・・・」 (驚)

「今から斬魄刀の出番だよ。」

始解はしなくて良いか。

「まずは銀虎！・・・雷砲！」
ラコボウ
レイボウ

文字通り、一振りし、その斬撃が雷の砲弾になり、出てきた海王類を襲う。

ギヤアアアアー！ー！

「悲鳴上げてる・・・。」

フア 「！？」

二 「斬撃が形を変えた！？」

そういう技だし。もうちょっと披露しますか。
お？ちゅうじ海王類がバンバン出てきた！良い的発見！

「大雷」
オオボウ

縦に振つて出てきた斬撃が雷に変わり、大型海王類を4匹直撃。

「真つ二つだ・・」

毛公鼎

「あー俺、三本の斬魄刀に選ばれたから。どれも斬魄刀の中でも伝説級の。」

モ「伝説の伝説！？」

「そんな感じ。」

「次は青龍。・・・・・水蛇！」

水の蛇。相手に向かつて空間を泳ぐ。

「次は黒鷹。・・・・・黒穴！！」

突如、海王類の真下にブラックホールできた。まあ、斬撃が海中を通してそこにできたものだけど。ブラックホールだから、海王類が吸い込まれていく。うん。奇妙な光景だな。

あまり使いたくないなー。でも、使う。矛盾してるな。

斬魄刀を納刀する。

「「「」」」りや、勝てないな・・・。」

モ「そりやそうだ。」

「ふう。そうだ、白鳳凰も一つやるつか。」

何にしよう。・・・・あ、技はゾロとかと一緒に事がが多いから。

「一刀流、ひりゅう飛竜火縄！」！」

はい、ゾロと同じ技です。

「確認終了。ん～～つ、はあ。とりあえず休憩。」

5 斬魄刀の威力確認（後書き）

技が・・・普通。（笑）
しつかし、疲れた・・。

次回は決まってないね。学校で考えてきます・・。

翌日

「...」

なんだよ、ふあ～～～～

港はまだ生き物がいるんだよ!! 四方の!!

一
我がかな

まさか、虚じやねえよな！？俺はいつも死神の格好にしてる

いつでも出撃出来る様に。

「ちょっと行って来る! “瞬歩” ! ! シュンッ

「ああ！！！行っちゃつた！！！追わなきやーーー！」

軍港

海兵「なんだよ、」の生き物・・・・。ヒイー！」

？？「オイシソウダナ・・・。」

海兵「ど、どっか行け！」

？？「クワセロ・・・。」

海兵「・・・」ガタガタ

シユンツ、スタッツ。

まづい！海兵がやられる！

ザシユツ・・・・ス――――

危ねー。虚を斬り遅れたら二つ死んでたな。

「大丈夫か？」

海兵「・・・。」

「あーあ。失神してるし。」

まあ、しょうがないな。

アーティストが！？

「あ、アスク。ちゅうしょくいじに来た。」の海兵がゐる。」

アーティスト失神してゐる

「虚に襲われそうになつて、失神した。虚は斬つておいたから大丈夫。これから忙しくなりそうだ。」

ア
ー
そ
う
だ
な
」

「アーッ!? ここにも出たの!?

一
あ
あ
「

フア一怖いよ――!――!

「お前、軍学生だろうが。」（苦笑）

「アガハ、これは無理!!」

だらうな。いくらなんでも一般は無理だらう。

「アーネえ！報告書とか書くの？」

「当たり前だ。」

「 フア 「ええーーー？」

「でも、書く」とは少ないからな。」

「 フア 「そつなんだーーー。」

「 ああ。戻るぞ。」

「 フア 「ああーーー待つでよーーー。」

『 教室 =

先「今日の朝にホロウを発見し櫻井が対処してくれましたが、緊張
は無くなりません。」

二「え、じゃあ。海は？」

二口は席順番号は3番。

ガラガラ

「 フア 「遅くなりました。」

「 フアールは席に着く。ちなみに番号は2番。」

ガラガラ

「アスクの所に居ました。」

先「『』苦労様です。」

「どうも。」

フア「海ー海は一番だよー！」

「ああ。」

どひやー、一番のようだ。

先「1番の櫻井 海。2番のラックス・ファール。3番のレオ・ニ
ッコ。以上3人は一年間番号は変わる事は無い。実力が分かった。昨
日、海軍上層部と政府上層部が会議で決めた事だ。」

? ? 「すつげーなー！」

「？」

誰だ？

? ? 「俺はオリック。ラニー・ヨ・オリック。今の番号は六番ーよろ
しくなー！」

「よろしく。」

こいつは、最も外国人っぽい名前をしてるな。

先「櫻井は今日・・・今から、海軍本部の上層階へ行け。そこの階段で案内の海兵がいるはずだ。そいつに着いて行け。今日は海は仕事のみだ。」

「分かった。」

早速、行こう。

6 iRIの世界に来て初めての虚退治（後書き）

次回は仕事です。

7 総帥と対面

＝階段＝

階段を上り始めてからどのくらいの時間が経つただろうか・・・・・。

海兵「あー。」

「・・・・・」

海兵「氣づいてくださいー。」

後ろ？

「・・・・朝、虚に襲われそうになつた海兵か？」

海兵「はいー助けてくれてありがとうございますー。」

「まあ仕事だからな。」

海兵「もしかして、上層部に会つんですか？」

「そうだが。まさか、お前が案内役か？」

海兵「はいー！僕ですー！付いて来て下さい。」

「ああ。」

しばらく歩いて、大きな扉の前に付いた。

海兵「ここです！では！今日はありがとうございました！」

「ああ。じゃあな！」

・・・・・前言撤回。扉じやなくて、襖ふすまだつた。

・・・・・ってか、大きすぎるだろ。なんだよこの大きさは・・・。巨人族が居るから納得できるけど、よくこんな大きい襖をあけられるよなー。まあ、こここの世界の人間つて大きい・・・人間じやなくて、もう生き物全体がデカイか。ここは弱肉強食の世界だな。

「よつ！」

ススス――――――

ビビ――――――ん！――――

「・・・・・」（汗）

なんでここのなに面のー。全員集まる必要あるのかー—————.
—————.

どんだけ、重要な会議をやつてたんだよ—————。俺らみたい
だけど————。

これ、絶対に昨日のままだよね？

セ「遅かったな。」

「…………すっとこのままだつただろ？」

絶対にそうだ。

セ「そうだ。」

「ソリで寝てたのか？」

「べつなんでも、それは無いだろ。

セ「そうだ。」

「…………何やってんだよ。」

サ「つむれこなれのー。」

「お誰だよ。」

サ「わしゃあ、サカズキじやー！大将じやあー！」

「怒る事は無いと思うが？」

サ「うるさいけえのー！」

「はいはい。・・・・・・はあ。」

ここは、大丈夫だろうか。身の安全を大切にしないとな。

セ「そこの席だ。」

ここか。

セ「ふむ。」

? ? 「センゴク、ちょっと良いか？」

セ「コングさんどうぞ。」

コソ「おれは、世界政府総帥のコングだ。」

「俺も名乗った方が良いか？」

コソ「そうだな。政府の人間は知らん。」

「俺は、護廷十三番隊特別部隊通称“零番隊”的隊長、櫻井 海だ。」

「

「ン」「零番隊って事は普通の隊より強いって事が？」

「やつだ。零番隊はまだ一人しか居ない。」

「ン」「お前だけか。」

「ああ。」

「ン」「まあ、お前の威力確認だつたか？それを見たが・・・強すぎないか？」

「あれは基本だが？」

「ン」「！？あれで基本つていいつもりか！？」

コングはバンッ！と机を叩き怒鳴る。

「だから、さつきので察してくれ。俺は零番隊隊長だ。」

「ン」「隊長がどついた！」

セ「何故、そんなに落ち着いてられるのだ？」

サ「覇氣が出てるひめーに。」

なんか言つてるし。

「零番隊だ！」

「……『それがどうした！』

「零番隊だから、それくらいの強さが無いと勤まらないんだよ……！分かつたか！？」

あ……怒鳴っちゃった。

「……すまない。」

「いや……。」

「……『氣にしないでくれ。だが、今のは本当にすまなかつた。』

「……。」

なんか、『氣まずいぞ……』『OK氣』……。

7 総帥と対面（後書き）

終わり方があああ・・・・・おれぞ。

8 今後について

沈黙が続く。

「…………」

その沈黙を破つたのは、

セ「コングさん…………」

センゴクだった。

コゾ「ああ。」

セ「櫻井。今後について話す。」

「今後？一年後の事か？」

セ「そうだ。」

「一年後は俺は海兵。階級か？」

セ「察しの通りだ。櫻井の階級についてだが、卒業したら少尉から初めて貰いつ。」

「何でだ？俺は一番だからか？」

セ「そうだ。だが歴代の一一番だった海兵はここにも居るが、少尉か

らは始まらない。皆、曹長からだ。何故、少尉から始まるか。それは、櫻井の実力を見て私達で決めた事だ。」

「まあ、俺は拒否しないけど、拒否権は無いんだろう?」

セ「そうだ。それでだな、この一ヶ月間どうするんだ?」

「そりゃあ、仕事だろ。」

セ「そうか。見ることとは?」

「さあな。」

セ「…………まあ、いい。もう用は無い。」

「やうか。じゃあ、俺は戻る。」

ガチャ・・・・・バタン

ふう。教室もど・・・・・あ、もつ終わってる。

食堂行こうかな?

= 優等 =

賑やかな食堂で飯を受け取る。

ファ「あ！海！」

ファールの向かい側に座る。

「 よお。 なあ、 お前つて卒業後の階級つて決まつてるか？」

七
元

いきなり静かになつた食堂。

「アーティスト」

ざわざわ

「決まつてるけど。」

— 1 —

再び静かになる食堂

トントン

調理の音しか聞えない。

「「おれも決まってるよー。」

トントン

あれ?止まつた?

トントン

「階級は?」

なんか海兵らが止まつてるぜ?なんでだ?

フア「軍曹かい。」

トントン・・・トントン

一回止まつたぞ?

「俺も軍曹から。海は曹長からだろ?」

トントン

「いや、俺は実力を買われて“少尉”かい。」

・・・・・・・・・・

あ？確実に止まつたぞ？

全員「…………」「少尉」からああああああああ…………？？？？？

「よくハモるなあ」には。

二二二

「え!? マジ! ?」

「だ、ひさしき言われたもん」

ヘルメッホさん、あの人凄いですよ。」

へ、聞いた。わかるだぞ、二匹、しかしも俺達も見たからな。

二
ながれて
」

へまあな

アーヘえ。“少尉”からか。頑張れよ？」

一
あ
あ
「

ア「そういえば所属部隊は?」

「あー、中将以下を希望したよ。毎年変わるらしい。まあ、変わら

ない事もありそうだけど。抽選だから。それで、今日ここでも……。
あ、来た。」

ア「おお。抽選箱だな！」

「ここから引くようだ。」

オ「この中に紙が入ってる。初回は、中将11名だが、ラクロワとかも入れて欲しいと言つてたが……良いか?」

「?」

オ「巨人族だ。」

「別に良いよ?」

オ「そうか。」

「……となると? 1~3名か?」

ガサガサ

オニーグモが抽選紙をかき混ぜてる。

オ「そうだ。この箱に手を入れて一枚だけ取れ。」

「……なあ、何でお前らまで……。」

ファ「だって、これで決まるんだよ?」

「そうだけじゃ。」

ガサガサ

ファ「とか言いながらもう手突っ込んでるじゃん!」

「まあな。これで良いか。」ヒョイ

オ「誰だつたか?」

紙を開けるとそこへ書いてあつた名前は・・・・

D a l m a t i a n

ダルメシアン中将だ。

オ「ちよつと、待つた。ヒントくれ。」

「ヒント?・・・名前に動物名が入ってる奴。」

ガーネン

入っていない中将が落ち込む。

オ「うむ。誰だ?」

「犬。」

オ「犬?」

ドー「俺か?」

ダ「いや俺だろ。」

「後者。」

「ドー・ドー・ドー。」

ダ「俺か?」

「ああ。よひじぐ。」

ダ「よひじぐ。」

ドー「あ・・・・・。」

「あはは・・・・・ドンマド。」(苦笑)

ドー「あ・・・・・。」ガクッ

あ、落ち込んだ。

ダ「フジ。」

ドー「調子乗るなよ！」

ダ「ドンマイ。」（微笑）

ドー「う・・・。」

ダルメシアン、笑ってないか？微妙に。なんか勝ち誇った顔でもあるけど。

オ「決まりだな。一年後には、ダルメシアンの専属海兵だ。」

「分かつた。」

そういえば、

「ファール！一ロード前りはめび！」？

ファ「俺はガープ中将。」

二「俺は青雉大将。」

「へへ頑張れよ。なんかそこ嫌な予感がするからな。」

ファ「え！？」

「俺の予感はほとんどの的中する。」

—「えー！？でも大丈夫だよ！！」

「なら、良いけど。」

まあ、卒業後の初回の専属上司が決まり、階級が決まった。

8 今後について（後書き）

疲れたー。

こんな感じです。

次は・・・・なんだっけ？次回は今日か明日更新。

（1時間後）

ファ「あーすー」「ねー！」

「あ、俺もビックリヤ。歴代の一一番は毎回曹長からだからな。」

「それより2つ上がったんだねー！」

「せうみたいだ。」

ガ「ファールー！一口！櫻井！」

「んあ？」

ファ「ガープ中将ー卒業後よろしくお願ひしますー！」

ガ「よろしくじゃーそれでー今から、わしら中将の部下全員集めて、超大規模鍛錬を行うのじゃが行くか？」

ファ&一「行きますー！」

ガ「そうか。なら早くいつもの場所でのー！」

ガーペはそこにに向かつていった。

それだつたんだな。他の中将達と海兵達がいつの間にか居なくなつ

てたし。

ファ 「海！俺ら先に行くからなー剃！」 シュン

二 「剃！」 シュン

あーあ。まあ、俺の方が速いし。

「瞬歩」

シュンツ

『大鍛錬場』

ここはいつもと同じ場所だが、高さが調整されていた。

シュンツ、スタッ

「ふう。」

全員 「 」「 」「 」「 」「 」 「 」「 」「 」

シュン

シユン

フア「あれー?」

ニ「えー?」

「あ、これは“瞬歩”。」

フア「なんでそんなに速いのー?」

「秘密。」

ニ「えー——————!」

「なあ、これって俺何すれば?」

ダ「いらっしゃい。」

「おひ。」

ガ「二口。フアール。いらっしゃるございやー!」

フア「はー!」

ニ「はー!」

ダ「海。って、呼んで良いか?」

「ああ。」

ダ「海。俺の部下と手合わせこむ。」

「全員でかかつて来い。まあ、すべ終わるか？」

ダ「はあ？」

「リリード面元の全員……ロヒフラーも含めてだ……全員で俺に懸かつて来い……。」

二「海？」

モ「正気か……？」

「相手してやる。勝つ自信はある。」

ダ「何言つてんだ？」

「……どんなに多くても一瞬で終わると思う。」

ダ「へえ。じゃあ、5分後に行くぞ？」

「ああ。だからでも來い。手加減は無しだ。基本で行くから」

ファ「何がしたいの？」

「限界を試したいんだ。」

フア「あ、そういう事か。」

「5分後だ。」

鬼道の限界を試したかった。俺は零番隊長。ハカラサヒト魂界では試す事はできない。限界は最初の“一”から。今から行おうとしてるのは、『ハカラサヒト縛道の一、塞』これだ。

それを今からその複数の人数に向けて行う。

（5分後）

ダ「本当にに行くぞー！お前ら行くぞー！」

ウオオオオオオオオオオ！…………！

叫びながら来るなよ。五月蠅い。おお、さすがだ。剃使つてる奴も居る。

さて行きますか。

「『複数系縛道の一、塞』……」

ダ「うう……。」

モ「なんだこの金縛り……ではないが！」

二
痛い！

「なんですか、これ！」

へまつたく解けないそ

「ふう、成功。（解け）」

ダ「はあ、開放された。」

モ「はあ。」

「アーラ、やつぱり、勝てないよ。」

二
今更かよ。

「はあ、やいだあ。

へ
—
なんなんだ?
」

卷之六

「ああ。確かに、勝てないな。」

「ああ。
ん？」

ダ「どうした？」

٢٠

「あ、これ虚発見のサイレン。抜けるよ。」

ダ「ああ。ビード?」

— — — — —

ダ「増えた？」

「さうだな。だが全て違うところだ。これは影響が無い。行ってくる。」

ダ「おお。」

シユンツ

「相変わらず速い・・・。」

10 シャボンティ諸島46番GRRのボスと対決

「Jリマセシャボンティ諸島。

『46番GRR=

46番GRRは、無法地帯。そして、海賊の集まり場所にもなっている。が・・・・・

グオオオ！！

虚も集まつてしまつよつだ。

「うひ。なんでこりんな無法地帯に。」

『クワセロ・・・・』

「ん？大群？あ、そんなに多くないな。7体。全部ここに集まつてきたか。」

『死神――――ソノタマシイクワセロ――――』

「残念。俺は他の死神と比べるなよ。」

「その衝撃は雷より竜巻よりも強し。“雷竜巻”
始解はしていない。

雷と同じくらいの電圧を縛つた竜巻が虚に襲つ。

ギャアアアアー！！！！！！ス――――ツ

「フンッ。雑魚が。」

？？「誰だ？貴様、俺の縄張りに入るとはな。いい度胸してゐるではないか。ハハハ。」

「誰だ。」

？？「俺はジャッキー。」の46番GRのボスや。」

「海賊か？」

ジ「世間では、そう言われてるが。今は元海賊でここにボスだ。」

「あんまり変わらないだろうが。」

ジ「ふん。貴様も名乗れ。」

「俺は櫻井 海。」

ジ「そうか。海。手下に入らないか？」

「断る。俺は現在海軍士官学生。来年は少尉だ。」

ジ「ほう。海軍さんか。じゃあ、相手してもうつか。」

「手下も、か？」

ジ「当たり前だ。テメヒらー！出て來い！」いつに向かって存分に暴

れろ！

ウオオオオオオオオ！――！――！――！――！――！

「うつせえな。つたく、雑魚が。」

ジ「ふん。数は多いからな。」

だいたい、200人ぐらい居る。でも海兵より少ない。簡単だ。鬼道でいいこう。

『複数系鬼道、縛道の一、塞古

ジ
ー
何
！
？

「俺をなめない方が良いぜ？」

ジ 貴様――――――――――おらあああ――――――

すいふんと間違った使い方をしてるな

刀を振り回してゐる。

ジ、「うるせえ！今は貴様を殺すのみ！」

「あ、お前懸賞金は?」

ジ「一億5000万だ！」

「へへ、意外と高いんだね。でも、残念お前は負ける。」

ジ「誰にだ！」

「俺に。」

ジ「やつてみるかー。」

「『縛道の九、撃』『破道の十一、綴雷電』」

まず、ジャッキーを赤い光で縛つて、綴雷電を撃つ。

ジ「うがああーーー！」

「だから、言つただろ？まあ、海軍本部に戻るからさ。連れて行くよ。」

あ、でもここひびひびひびひ。あ・・・

(青龍ー)
(なんだ。
(こいつら、海軍本部に連れて行くから、手伝つて？)
(分かつた。)

青龍が刀でもなく人でもなく龍になつた。

青「これで良いか？」

「ああ。俺も乗らう。よつ。」

青「しつかり捕まれよ。」

「おお。」

角を持つ。

青「角?」

「え? 駄目?」

青「いや、駄目ではないが。(角は敏感なんだよ。海。)」

「行け。」

青「お、おひ。」

『海軍本部』

海軍本部に無事に着いた。

兵「なんじや」「つやああああ……。」

「青龍。いつもは斬魄刀だが。おい、戻れ。」

シユルルル

青龍が元の形になる。

兵「なつーちこつは・・・・・。」

フア「あー戻つて来たあー！」

「フアール、五円蠅い。」

フア「ええー? 酷つーーー。」

「ジャッキー。懸賞金2億5000万B。シャボンディ諸島の46番GRのボスらしー。他の奴らはその手下だ。」

一一「ええー? 学生なのに億越え捕まえつけられたのー?」

「お前りこひこひりむせべ。」

フア「あ、いめん。」

しかし、どうやって懸賞金決めてんだ。どちらめではないのか? アスクにでも聞いてみるか。

10 シャボンティ諸島46番GRのボスと対決（後書き）

まあ、簡単に判決がききましたー。

11 残り1ヶ月にサバイバル競争修学旅行決定

「こ」は医療施設。

「アスク～居るか～？」

ア「大声出すな。こ」は医療施設だぞ？」

そうだった。こ」は医療施設だったね。てかさつき自分で言つてた・

・・（笑）

ア「で、なんだ？」

「医療とまつたく関係ないけど、懸賞金ひとつ決めてるの？」

ア「え？ なんでそんなことをいきなり？」

「今日さ、『剣振り』のジャッキー捕まえたんだよ。で、あまりにも弱かつたからさ。」

ア「（そんなに弱くないけどな）報告書で決まるよ。」

報告書かよ。基準無いじゃねえか。

「でも、最終的には？」

ア「最終的には会議だな。だから大海賊時代になつてから会議が増えてる。」

「へへ、でも実際でたらめだと思う。なんでコイツがこんなに高い

んだ?つていつのがたまにあるじ。」

ア「たしかに。」

「まあ、ありがと!」

ア「ああ。(海が報告書書いたら懸賞金は上がりこくへくなるな。)」

それから約1ヶ月。現在3月。

そして、先生から発表があり、

「今日から1ヶ月サバイバル競争修学旅行を行います。ペアを組んでも組まなくとも良いけどこれは、組んだ場合結果を人数で割る事になるので組まない事を薦めます。この結果は卒業後の階級に影響が出ます。仮で決まってる3人も上下するかもしれない氣をつけるように。以上!それでは開始!」

・・・・・・・どうやら「」の「」の内容のようだ。正直
言つてつまんねー。

フア「海?行かないの?」

「あ？あ、お前はどこ行くの？」

ファ 「え？ローグタウン。一口と偶然一緒にたけど？」

「俺は…………なんなんだよ……」

周りが二つばかり見てるんだけど……。

先 「どこに行くんだい？」

「シャボンディ諸島。そこの方が暇じゃないと思つて。虚も集まり易いから。」

ファ 「そんな理由なんだね。」

「ああ、俺はもう行くから。」

ファ 「うんーじゃあねー。」

「ああ。」

シュンツ

ファ 「え？普通瞬歩で行く？？？」

1.1 残り1ヶ月にサバイバル競争修学旅行決定（後書き）

「めんなさいー！短すぎましたあ————！！！
次回は今日更新するようにしますので————！！！
見捨てないで————！！！あ————！！！」

12 結果発表

あー。またシャボンディ諸島に来ちゃった・・・。

まあ、標的が多いからちょっと楽しい。・・・あー問題児になっちやつたかな?でもいいや。早速海賊捕まえに行こう!-

＝25番GR＝

ここは住居街だ。

キンッ、キンッ!

金属音?刀か。

賊「！」で暴れて懸賞金を上げろ――――!

ウオオオオオオオオ!

大勢の人だからがあるので金屬音しか聞えない所で

「うるせー。」

と、言った。そしたら、

『！？誰だ！』

反応しやがった。・・・しない方が変か。

「俺だよ。てか道の邪魔すんな。『破道の一、塞』」
本当に邪魔。

「こいつらじつよ。まあ、いいからやめやめ。」

「こんな事を繰り返す」と30日。
海軍本部に戻った。

セ「これから結果発表をする・・・」

会話はめんどうだから、ここが書いてある。」

第三位 二口 15組

第一位 ファール 28組

第一位 僕 59組

階級は、

二口は准尉。 ファールも准尉。 で、 僕なんだが・・・・何故か大尉から。

仮より二階級も昇格したのだ。 まあ、 一ヶ月で59組も捕まえる奴居ないから納得はできるよ！？

でもさ。 いきなり卒業後大尉は無いと思うがな。 まあ、 明日から海兵だ。

12 結果発表（後書き）

今回の方が短い！？

翼
日

Digitized by srujanika@gmail.com

לענין תרומות

あ
・
・
・
・
・
朝
だ。

詩經卷之三

勝文

その頃、港では。

フアーまだ、来ないの? 海

二「みたいだな。」

「なあ、今誰かの声聞えなかつたか？」

——「聞えた。」

「誰の声だ？」

ガ「そんなの知らん！ 青二才！」

ク「知りませんよ。」

ア「なんとなく・・・・じゃないけど分かってる。」

「アスク少将！誰なんですか？」

ア「海だ。」

スタッフ

「遅すぎだよ。」

「ごめん！寝てた！」

「えええ……寝てたのーー!?」

「あはは！」

ガ「ぶわっはっはっは！相変わらずじゃの～！」

——「あれれ? ハートは?」

「『マーク?』」云々とかが着てる??

「アーネスト、」

ダ「ほら、海の『コード』。特別な『コード』さ。科学部隊が1年掛けて造つた『コード』だ。海が想像した色、形、長さなどなどを実現に移す物だ。大丈夫、機械では無い。」

「ふう。（じやあ、）この隊長服と同じにして、文字は正義で。」

すると変わっていく。

ダ
ー
！
？

二「わー！」

フア ハセキ

ପ୍ରକାଶନ

ダ「ふむ。ガープさんと青雉大将殿は？」

ク&ガ「仕事。」

「あつそ。」

ク「ねえ、俺一応大将。三大将の内の一人。」

「信号機か！？」

「いや……まあ……うん……。」

「『はつきりしてください』！」

ク「あーー口准尉。」

ニ「はい？」

ク「早く乗りなさい。」

ニ「はつ。」

ガ「ファール！ 行くぞい！」

フア「はい！」

ダ「俺達も行くか。ほら行くぞ。」

「あー待てよ！」

13 遅刻（後書き）

はあ。今日死んだ。テストが・・・・orz。

14 あの海兵、書類に埋まつてゐるし（笑）

＝ダルメシアンの職務室＝

ダ「あ、海。今日から大掃除だ。」

「大掃除？」

ダ「ああ。あまりにも酷いからな。」

「どんな状況なんだよ・・・・。」

ダ「まあ、見たら分かるぞ。」（苦笑）

苦笑いするほど！？おーおいおいおいおいおいおいおいおいおい。大丈夫な
のか海軍本部。

ダ「掃除・・・・・しに行くぞ。」

「なんだよその間ー！」

スタスタと歩いていく俺の上司。

「ああ！－逃げた！」

＝資料室＝

ここは資料室。棚に入りきらなくて溢れている資料とかが海兵達を襲う。

「うわー。」

つい、この状況を見て言ってしまった。
そして、この言葉に海兵達が反応した。

海兵「あ！ダルメシアン中将！海大尉！」

「あれ？ 知つてんの？」

ダ「昨日、発表したからな。」

「あーなるほど。」

で、あの海兵大丈夫なのか？将校だよな？てか書類に埋もれてるし
(笑)

ダ「何笑ってるんだ？」

「あ、いやー」(笑)

その海兵の所に行く。笑いながら。

ガサガサ

将校「ふはっ。はあ・・・・・あーありがとうー君は・・・・海
大尉かな？」

「ああ。」

? ? 「ふふつ、さつき笑われてたわよ？」

「……ジユリ大佐殿！！」

ジユ「フフッ。そう、私はジユリ。このコはバン少佐よ。私の後輩よ。」

「あ、どうも。海です。櫻井海。」

ジユ「噂の海大尉ね。私は黄猿大将の部下よ。」

「噂？」

バ「残り一ヶ月の間に海賊を59組捕まえて予定より2階級上がったっていう噂。」

ジユ「私も、ダルメシアン中将部隊と一緒にこの資料室の大掃除係なの。と言つても元々この部隊から今の部隊に移つたから私。」

「へへ、じゃあ、違和感とか無いの？」

ジユ「そうね。無いわ。」

ダ「いら、話して良いなんて言つてないぞ。」

バ「あ、すみません。」

ジユ「すいません。」

「・・・。（違和感くらこあるんじやね？まあ、変わつてなかつたら無いかもな。）」

ダ「海？」

「（俺は・・・あ、部下居ないじゃん！）」

バ「何か言えよ。」

「（あははー俺バカだ！）」

ダ「海？何か言つ事あるだう？」

「え？何ぢうしたの？」

ズルツ

その場に居た俺以外の全海兵がこけた。

ダ「お前は・・・まあ、いい。」

いや、だから何だし！

14 あの海兵、書類に埋まつてゐる（笑）（後書き）

そういえば、オリキヤラたくさん出てたな。設定でも書くか。

15 オリキャラ設定

【名前】

ファール

【性別】

男

【職業】

(予定) 海軍本部軍曹

海軍本部准尉。

【所属部隊】

ガーブ中将専属部隊

【出身地】

西の海デスケ島

【年齢】

16歳。

【イメージカラー】

オレンジ

【容姿】

海兵服（下）ヒトーシャツ（ヒトニビホレンジ）

【戦い方】

- ・六式を使う。（無事に六式を一応習得。完璧にマスターしてはない。）
- ・日本刀（大業物21寸の一つ）（名前不明）

【霸氣】

まだ何も覚醒していない。

【弱点】

- ・虫
- ・気温が30度を下回った日。

【名前】

二口

【性別】

男

【職業】

(予定) 海軍本部軍曹 海軍本部准尉

【所属部隊】

青雉大將専属部隊（弱点をなくす為）

【出身地】

南の海ルキナ島

【イメージカラー】

黄色

【容姿】

ゴーリーと似たような服装。

【年齢】

16歳

【戦い方】

洋刀（1刀）

【覇気】

まだ覚醒していない。

【弱点】

- ・気温が35度を下回った日。（結構暖かい気候の島で生まれた為。）
- ・氷

【名前】

バン

【性別】

男

【職業】

海軍本部少佐（部隊の副面の副面）

【所属部隊】

ダルメシアン中将専属部隊

【出身地】

西の海トアス島

【イメージカラー】
藍色

【容姿】

将校限定コートに藍色のスース。

【年齢】

25歳

【戦い方】

- ・悪魔の実の能力
- ・六式

【能力】

動物系ネコネコの実 モデル“ジャガー”

【霸氣】

見聞色と武装色の使い手。武装色が得意。

【弱点】

- ・水
- ・またたび（好物だが、すぐに酔つてしまい仕事ができない為。）
- ・気温30度を下回った日

【名前】
ジユリ

【性別】
女

【職業】

海軍本部大佐

【所属部隊】

ダルメシアン中将専属部隊

黄猿大將専属部隊

【出身地】

東の海ホルドフ島

【イメージカラー】

薄ピンク

【容姿】

将校限定コートに濃いピンク色のスース

【年齢】

33歳

【戦い方】

- ・悪魔の実の能力
- ・六式

【能力】

動物系ヘビヘビの実 モデル“マムシ”

【弱点】

見聞色と武装色の使い手。見聞色が得意。

【弱点】

- ・水
- ・気温が30度を下回った日。
- ・3大将と元帥。（ジュリ曰く、なんか全体が嫌い。）

こんな感じです。

「いや、だからなんなんだよー。」

ダ「気にするな。」

とか言いながら俺の頭を撫でる。

バ「あの、この余った書類ビビりしまじょうか。」

ダ「…………。」

バ「中将?」

ダ「分からん。」

ジユ「分からないのー!?」

ダ「何か方法はあるのか?」

バ&ジユ「うう…………。」

「おい、いい加減に手を離せー。」

ダ「駄目だ。」

「はあ。…………手段はあるんだ。」

バ「え！？あるの！？」

「ああ。“リサイクル”だ。それを細かく切り刻んで水を入れ加熱。インクは水溶性だから少し紙の色が変わるものだから気にしなくていい。その加熱した紙水をもう一回紙にする。この方法だ。」

ジユ「何それ。結構面倒じやないの。」

「俺が工場を所有しているからその工場を使えばいい。俺が工場に持つてい……あ、あれ使えばいいか。」

ダ「あれ？」

そう言いながらも、撫でるのをやめない上司。気持ち良いから許すが。

「これだ。『空間瞬間移動ジッパー』」

ジイ——

ダ「！？」

バ「！？」

ジユ「！？」

開いたら工場内が見えた。この工場は製紙工場。隣にも工場はたくさんある。

俺は海兵達の3割を貸してもらい処分が決まった書類をシユレッタ
ーに入れていく。

上司と海兵達は資料室でまだ処分しても良い書類を捜している。
決まった書類はまた工場に持っていく作業を繰り返して、

（1時間後）

来たときにあつた書類が4分の1までに減った。物凄い変化だ。

ダ「うむ。海のおかげだな。」

「あ、俺なんだ。」

ジユ「手段を教えてくれたじゃない。」

「あ、そうか。」

ダ「お前ら知ってるか？一番部屋が多く綺麗にできたらボーナス +
給料1・3倍になるって。これはな、部隊で競争する物だ。」

海兵「本当ですか！？」

「本当だよ。盗み聞きで聞いた。」

ダ「おい・・・。」（汗）

「よーし!次行こう!...」「グイグイ

ダ「ああ。・・・スーツを引っ張るなーーー！」

「行こうよー。」

ダ「(うう・・・それ反則だぞ。)」

「早くーーー！」

バ「あはは、勝てないみたいですね。」

ジユ「まあ、海には勝てないよ。」

バ「そうですね。」

16 空間瞬間移動ジッパー（後書き）

ダルメシアンは主人公に弱いです。

17 次（最後）の場所はオリス広場

「次は・・・ええ！？広場！？」

ダ「何！？」

「まあ、良いんじゃね？ポイントも多いし。俺、広いところを掃除するには慣れてる。」

隊舎がデカイからな。

ダ「分かった。広場へ行こう。」

＝広場＝

ダ「そうするつもりだ？」

「これだ！」

バ「何それ。」

「『高圧洗浄機』」

(余談) 日本橋もこれで綺麗になつたよ。

ジユ「あ、私戻るわ。」

「ねえ。」

ジユ「じゃあね。」

「あと、あーバン。」

バ「はい?」

「このホースを海に!」

バ「はあ。」

ボチャ

「スイッチオン!」

あ、もちろん洗剤で広場が泡だらけだよ?。

プシャアアア

バ「お~お~お~!綺麗なってへ~!」

「おりゃあ~」

ダ「なんだこの差は。」

綺麗になつた所とその前の所の綺麗差が酷い。

「中将~!!」

「ダ「名前で良い。」

「ダルメシアン♪！」

ダ「それで此こ。」

「これ終わったら、報告に行こー！」

ダーツ時間だもんな。

「おつかれ～！」

プシャアアア・・・・・キユツ

ビクリ

ダ「いきなり大声出すんじゃない！」

「何がうつひよーですか!! 吃驚しましたよ!!」

「うん。」

海兵「大尉が・・・・・」

海兵「怒られて、」

海兵「「「しみじみ」といふ。」「」

海兵「いつもは陽気か強いの。」「

海兵「でもさ、大尉もこいつ所があるんだな。」「

海兵「意外だよな。」「

ダ「行くぞ。」わしゃわしゃ

海兵「なんで、」「

海兵「大尉の頭を、」「

海兵「「「撫でてゐるの?」」「」

海兵「こいつの間」。

海兵「でも、中将が怒らなくなつたよな。」「

海兵「これは大尉のおかげか。」「

海兵「大尉つて、おみくじで決めたもんな。」「

海兵「部隊をな。」「

海兵「「「こ確立で」」を当てたつて事だよな。」「

海兵「俺ひ、運つてゐる。」「

海兵「でも、毎年くじ引きだつてさ。」

海兵「来年も祈りうづぜー！」

海兵「そうだなー」

いや、くじ引きだから。無理だつて。2年連続はできるかも知れな
いけど。3年連続とかは奇跡だぜ？無理だつて。

「おらー、置いて行くぞ！」

海兵「あー待つてください〜〜〜！」

17 次（最後）の場所はオリス広場（後書き）

日本橋の話は本当です。

18 結果発表の司会役

二
広場

セー 結果を発表する

「てか、そこ緊張するか？」

バーチャルですよ！」

セ「…………誰か発表してくれないか？実はまだ見ていない。」

「は？何で？」

バ「ばつ！お前！元帥にそんな口！」

セ「良い。実は私も参加していくな。」

「じゃあ、俺発表するーーー！」

セ「頼んだ。」

「準備OK?」

バ「お・・お」。

「そんじゃ！結果発表～～～～～～！」

イエ――イ――

「何でそんなにシーンとするねん!!」

「いいからいいから早く！」

「うーん。あ、開けよ。」

バ
一
開
け
て
ね
え
の
か
よ
!!
」
バ
シ
ツ

1
テ

第一位！100ptの、「はい。」

#77

—あ、俺らの部隊だ。

バーザーたあああ！！！」

「えーと、掃除した場所は、オリス広場と資料室。どちらもポイントが高いです。両方とも満点！ イエーイ！」

「マジ?」

「お前キャラ壊れてるよ。次、第一位！96ptの、」

海兵「どうだ?」

「モモンガ中将部隊！」

海賦
卷之三

一場所、会議室と第1～3地区。会議室はポイントが高く満点。おめでとう!!

モ「よかつた。」

オーバー負けないからな。」

青 - 僕にも負けないよ

セ・ヒト 言い方変えます(9)

黃昇

第三位！場所 132階 935mのエレベルイン中将部隊！おめでとう！

「こつちが3位だ。オーラモ勝つたぞ。」

才「ふん。次は貰う。」

「第四位！場所、3～4階。90ptのオーブモード部隊！おめで

「うー！」

オ「ほらな。」

青「えー俺らは？」

「同じく四位！場所、食堂全体。90 m²のつる中将部隊…おめでとうー！」

「ひよっことにほんに勝てると思ったんだがね。」

青「でか俺らスルー！？」

「大将以上はトップ10に入ってません。」

青「ええええええええええええええ…！…！」

「第六位！あ、3部隊同時入賞！場所、5～6階のスマーカー大佐部隊！議事の間のガープ中将部隊！港のヤマカジ中将部隊！3部隊とも87 pt！おめでとうー！」

ヒ「スマーカー君に負けた。ヒナ悔しい。」

ス「ふん。」

ガ「ぶわっはっはっはーお前はいつまでも青一才じゃのー！」

青「ガープさん…。」

「給料アップは第十位まで！最後の第十位！」

ヒ「私の部隊よ。」

ジャ「本当ですか！？」

「違うよ。」

ヒ「私達は？」

「第十三位で75点だけど。」

青「じゃあ俺らは？」

「第十位一場所、第7～8地区。85点のラクロワ中将部隊！おめでとう。」

ラ「ふう。」

口「するござ。」

ラ「これが結果だ。」

「ちなみに大将部隊は、第十九位の黄猿部隊。第二十三位の赤犬部隊。第二十五位の青雉部隊です！」

青「全然駄目だ。」

口「いじばっ？」

「オマケ的に第十五位までわざと同じじよひに発表しますー。」

海兵「イエーイ！」

「第十一位！場所、5～6地区。83ptのロンズ中将部隊！おめでとう！」

口「2pt差か・・・」

「第十二位！場所、3～4地区。80ptのストロベリー中将部隊！・・・ええ！？・・・意外。」（笑）

スト「酷いぞ。」

「あははー！」めん。えーと第十三位はヒナ大佐部隊！場所、1～2地区で75pt。」

ヒ「・・・。」

「第十四位は4部隊が同時入賞！」

カ「ど二だ？」

「場所は省略します。えーと第十四位は74pt！カイゼルヒゲ中将部隊と「一ミル中将部隊と「ボーン大佐部隊とユキムラ少将部隊！おめでとう！」

あ？何々？「ユキムラ少将つて誰ですか？」つて？

あー、異名が“千人斬り”。

『これじゃあ、分からないので簡単に説明。頂上戦争で海賊から口
ビーを守った将校です。斬られましたが。by 作者』

だつてー。

「以上！第1～19位でしたー！」

バ「お前、司会得意？」

「楽しい～～～！」

バ「今更？」

「でもさ、優勝したね～～！」

バ「ああ。（こいつ、敬語忘れてないか？）」

ダ「ほとんど海がこなした気がするが。」わしゃわしゃ

バ「中将？」

ダ「罰ゲームなんだよ。だから満喫している。」

バ「あ～～！」

「でも気持ち良いから。」

バ「・・・・。（変な罰ゲームだな。）」

18 結果発表の司会役（後書き）

優勝――――――！

1～2地区は2部隊居ました設定。

19 一応、潜水士（前書き）

なんか久しぶりに書いた気分。

あー・・・・・あー・・・・・あー・・・マイクのテスト中——。はい。嘘です。

昨日優勝して、ここがボーナス+給料1・3倍になり、めでたしめでたし。

そういうえば海軍本部では、いろんな大会があるらしいよ? 昨日の大会は今年から始まつた新しい大会だったんだ。

でもさ、治安部隊に大会あんの? しかもここは軍だし。軍でいろんな大会が1年に何回も開催されるってどういう意味さ。普通に考えておかしいよな? でも毎年恒例で行われていて伝統みたいだよ?

まあ、こういう軍もあるってことだ。

将校「おいー聞いてるのか!」

「んあ? 何だよ。」

いきなり大声呼ぶな!

将校「つたぐ。ちゃんと聞け。今日から、水泳が始まる。だから第一水泳室へ行け。地下にあるからな！水着は無くても良い。あつた方が良いと思うがな。とにかく行け。」

「ほーい。」

あーどうしよ。一応持つてるナゾ。でも、今日からって事は？何回もあるって事だよね？じゃあ、今日は水着にするか。

＝第一水泳室＝

の着替え室にいる。将校用着替え室に居るんだけどさ。上層部用、将官用、佐官用、尉官用つてあるんだけどさ、俺、今、上層部用に居るんだよ。

「何で此処？」

ダ「別に良いだろ。」

そう、俺の上司が突然、尉官用の着替え室に来て俺を誘拐したんだよー！酷くねー？

ダ「誘拐ではない。」

「勝手に文を見るな。」

ダ「うるせー。せつぞと着替えろ。」

「俺、脱ぐだけだから。」

ダ「…………着てたのか。」

「おう。なんとなく予想は出来た。」

モ「・・・予想は外れる物だぞ?」

「当たる人も居るんだよ。」

モ「・・・・。」

「あ、タオル。・・・・バスタオル並にでかくね?これ。」

ダ「海の場合、布団並だよな。」

「うるせー!」

あつた。タオルじゃないな。あの水を良く吸うタオルみたいな物だけ名前忘れた。

ザワザワザワザワザワツ

「なんかザワザワしてるー。」

ダ「行くぞ。」

「おう。」

タオルとか持つてレツツゴー!

海兵「うおー深い！」

海兵「大丈夫なのか・・・。」

モ「海、水泳は得意か？」

「おう！得意だぞ！」

ダ「てか、海。腹筋割れてるんだな。なんか意外だ。」

「割れてて何が悪い！」

モ「まあまあ、落ち着け。」

「おおーーーーー広い！」

ラ「当たり前だろ。」

「ん？あーーーそつか！」

巨人族が居るのを忘れてた・・・。（汗）

セ「整列しろ！」

整列をする。上層部の列に居るんだけど・・・。（苦笑）

セ「今日から」こま毎日使っても良い。と言つより、毎日あるから忘れるな！水深280Mあるから溺れる自信がある奴、能力者の奴は浮き輪を用意・・・・事前に用意してたか。まあいい。もう始めて良いぞ。何をしても良い。ちなみに底には海棲石がある。取つてみろ。これは上級者しかできない。生身で出来る訳がない。巨人族でも届かない所にあるからな。それでは開始。」

「よーし！入るか！」

底に行きたい！だつて、俺、潜水能力が凄いんだよ！1時間潜れる時があるし、見えるし。生まれつきなんだ。凄過ぎ！

・・・・・・・・・・

「え？入らないの？」

海兵「だつて・・・・なんか・・・・・。

海兵「深いし。」

「海兵だろ？海の方が泳ぎ難いんだぜ？だから今泳げない今まで海に放り出されたら死ぬだけだぜ？」

本当の事を言つた。

海兵「よしー行くぞ————！」

バシャアアン

「おーおーおー！入ってくー！」

「あ、ここに居たか。」

「あはは、浮き輪で浮くんだー。」

ダ&バ「「うねてー！」」

一
ひん
じや
！」

八
一
え
?

タツタツタツタツ・・・・・ハシヤ

ハ
ー
ああ！！飛ひ込んだ！」

ゴボゴボゴボゴボ

おー、深いー。えーと?今は?・・・水深50M・・・え?あ
と5倍あんの?深くね?

～6分後～

おー、底が見えた。

うん？あれば、海棲石？なんだ見えるじやん。

よし、3つ持つて上がる～！

海兵「ダルメシアン中将！」

ダ「どうした？」

相変わらず浮き輪に掴まつて浮かんでいる。

海兵「海大尉が上がつてきません！」

ダ「いや、海なら大丈夫だ。」

海兵「いや、あの、・・・はい。」

ブクブク

海兵「おおー誰がやつてんの？」

海兵「おおー誰がやつてんの？」

海兵「知らねえよ。」「

ブクブクブクブク・・・・・

「ふはつ！」

海兵一 ああ！生れた！

タ - たそ?

九二
九三

七八

「じゅーん！」

大仏に海楼石を3つ見せる。

セ「なつ！」

一俺、一応潜水士だよ？」

ダ「・・・・資格持ちか。」

「うーー生身でもOKーーーえへへつへへ」

海兵

海兵「…………」

海兵「…………」

唚然とする海兵達。

バ「お前、得意分野だったのか。」

「おひで、今日そ、水着にしようかしないかですぐ迷つてた…」

・「（苦笑）

バ「お前、私服でもOKなのか？」

「こつもほとんど私服で仕事するし。」

バ「…………スゲエ。」

俺、苦手分野より得意分野の方が多いもん。どんどん発揮して行こうと思つ。

19 一応、潜水士（後書き）

昨日はなんか更新できませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4503y/>

大海賊時代に来た死神

2011年11月29日17時53分発行